

ここにこ×ハウマツチ

うーん、悩む。これは悩むぞ。

俺はアプリゲームの画面を見て熟考する。

今月のお小遣い残り3000円。狙いすましたようにやってきたサプチケ。

来月の仕送り日まであと数日とはいえ、ここで使っていいものか。

「おにーさん、何スマホ見ながら眉間^{みけん}にしわ寄せてるんですか？」

唸^{うな}る俺の視界にひよこつと時雨^{しぐれ}が顔を出す。

「課金しようか迷ってるんだよ」

「えー、やめましょうよ。それってあれでしょ。何十万円使っても好きなキャラが出なかつたりするんですよ」

「いやそういうのもあるけど、サプチケは違うぞ」

3000円払えば欲しいキャラを必ず貰えるんだ。しかもガチャも10回回せる。有情^{うじよう}！

俺も普段は課金なんてしないけど、年に数回くるこのチケツトのときは、流石^{さすが}に財布のひもが緩くなってしまうのだ。

「でもこういうゲームってサービス終了したら何も残らないんですよ。もったいないじゃないですか。あ、そうだ。そんな無駄遣いよりとっても素敵なお金の使い方がありますよ」

「なんだよ」

「これから私と一緒に寿司郎に行って、私にごちそうするんで

す」

「それで何が残るんだよ」

「私の可愛い笑顔が心に残ります」

「お前にとって素敵なだけじゃねえか。行くとしても晴香^{はるか}を誘うわ」

すげなく言うとき雨はしゅんとわざとらしく肩を落とした。

「お寿司食べたいなあ……。もう一年以上食べてないなあ……。ぷりぷりのエビ。こりこりのゲソ。トロを醤油^{しょうゆ}に絡ませてひと口。脂でくどくなった口をガリでリセットして、次はアナゴなんかもいいなあ」

上目使いに俺を見上げながらうるうる瞳を揺らす。

まるで捨てられた子犬のような目だ。コイツは自分の我儘^{わがまま}を通したいときいつもこんな顔をする。こうして同情を引くのが時雨の『手』だ。わかつてる。わかつてるんだけどさあ！

「……わかつた。今だけだからなっ」

「ホントですか！ やったー！ 妹に優しいおにーさん大好きです！」

「……お前のせいで俺の口の中まで寿司モードになっただけだし」

一応強がるがたぶん時雨には見透^{みす}かされているだろう。

我ながら妹に甘すぎる気がしないでもない。

でも、美味^{おい}しそうに寿司を頬張る時雨を見るのは割と気分がよかった。